二〇一六年一月二七日（参加者一〇名 伊丹昆陽池）

木々の間にひかる池面や冬日燦　菜々
蒼天へ諸枝を翳す冬芽かな　菜々
木洩日の小径辿れば春隣　菜々
薄氷に脚滑らしぬ家鴨どち　菜々
鳥影の礫うちなる枯木立　菜々
石の橋木の橋渡り踏青す　菜々
温むかと足踏み入れぬ汀まで　小袖
寒晴の中洲は鳥のハレムかな　小袖
枝移りする春禽の姦しく　小袖
橋桁に水かげろひて四温晴　明日香
八つ橋の下にほつほつ物芽出づ　明日香
探鳥会毛布を膝に車椅子　明日香
冬日燦昆陽の汀を吟行す　かかし
欄干に押しくらのごと百合鴎　かかし
風波をゆりかごとして浮寝鳥　かかし
ジェット機の爆音過ぎる枯木立　よう子
温かや母の形見の服なれば　よう子
遠嶺はや翠黛めきて春近し　ひかり
水に透く水掻き忙し鴨進む　ひかり
鴨をかし我もわれもと逆立す　宏虎
自ずから芽立ちの遅速池めぐる　宏虎
白鳥の首をＳ字に羽繕ひ　満天

吟行句会みのる選

二〇一六年一月二七日（参加者一〇名 伊丹昆陽池）